令和５年度第２回鳥取県総合教育会議 議事録

１　日　時

令和６年２月１６日（金）　午前１０時から午前１１時４０分まで

２　場　所

鳥取県庁　特別会議室　現地＋オンライン会議を実施

３　出席者

知事　　平井伸治
教育長　　足羽英樹
教育長職務代行者　　中島諒人
教育委員　　森由美子
教育委員　　松本典子
教育委員会事務局　次長　林憲彰
教育委員会事務局　教育次長　長谷川隆

有識者委員　大羽沢子
有識者委員　織田澤博樹
有識者委員　門脇友美
有識者委員　坂本哲
有識者委員　堀江愛
有識者委員　山下誉議
有識者委員　山田裕貴
事務局　子ども家庭部長　中西朱実
　　子ども家庭部総合教育推進課長　藤田博美

４　意見交換

・鳥取県の「教育に関する大綱」の改訂について

５　報告事項

・学力向上について（全国学力・学習状況調査、とっとり学力・学習状況調査及び英検ＩＢＡの結果と対応）
・令和５年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査及び鳥取県体力・運動能力調査の結果について

６　あいさつ

（中西部長）

・令和 5 年度第 2 回鳥取県総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして、平井知事よりご挨

拶をお願いいたします。

（平井知事）

・本日は大変お忙しいところ、教育につきまして語り合う、こうした機会にご足労いただきまして本当にありがとうございました。この度は、織田澤先生、さらに門脇様、山田様に新たに加わっていただきまして、メンバーとして新たな顔ぶれのスタートとなります。また松本委員には、別の委員会におられましたけど、今回教育委員会ということで、またお世話になります。よろしくお願い申し上げたいと思います。

・今、能登の方では、地震の影響で、なかなか学校が再開できないという状況がありました。子どもたちは、学校に行かないことで仲間を失い、非常に心にも不安感を強めることになりました。考えてみますと、我々も中部地震を経験したときに、倉吉市をはじめ地元自治体が頑張りまして、土日挟んですぐに開けたんですね。若干給食は間に合わなかったわけでありますが、子どもたちの歓声が学校にあって、仲間を得ることで育っていく、社会が形成されていくというのを目の当たりにさせていただきました。そういう意味で、今回、被災された皆様に心からお見舞い申し上げたいと思いますし、ご冥福をお祈り申し上げなければなりません。そういう中、教育、学校の場の大切さというのを、改めて私たちは、胸に刻まなければいけないなというふうに思った次第でございます。

・今日は、教育についての大綱を改訂するということになり、そのためにいろんな課題がございますが、ぜひ活発なご審議、ご意見をそれぞれのお立場、或いは思ったこと、率直にお出しいただければ大変ありがたいと思います。私たちはやはり、社会の実像と合った、子どもたちの教育の場、学校というものの運営を図っていかなければなりません。この総合教育会議がその意味で重要な役割を果たしておりますので、ぜひ皆様のご意見を賜りますよう、お願いを申し上げたいと思います。

・今、喫緊の課題として我々考えなければいけないのは、1つは学力の問題でありまして、かつては国語をはじめとして、本県、割と学力的には上にいた県でありましたけれども、残念ながら今、平均を下回るということも現実に起きてきております。体力の方は、いろいろとエクササイズのやり方の工夫などもありまして、持ち直してはおりますけれども、やはりそうした意味で、鳥取で育ったから、何かハンディキャップを負うということにならないように、教育の環境というのを我々、ちゃんと提示をしていかなければならない、作っていかなければいけないんだと思います。これまでもこの会議の中ではデータに基づいた施策づくりや運営が必要じゃないかという強いご意見もございまして、ぜひそうしたところも、今後徹底されるように、有識者の目でも見ていただければありがたいなと思います。

・また、今、子どもたちが学校を卒業してから鳥取に帰ってこないというのが、人口減少の大きな悩みになっています。そういう意味で新年度に向けまして、これまでのふるさと教育というのをさらに充実させることが大切だと思っておりますし、また併せまして、若手の方々、県民の皆様のご意見に基づきまして、教育委員会も一緒に、Uターンや定着について考える、そういう本部を新たに立ち上げることといたしました。ふるさとに対する理解を深めた上で、人生の選択を子どもたちがそれぞれ自由に行使するものだと思いますが、ただ、わからない、知らないから離れていってしまう、そういうことにならないような最低限の工夫というのは、しっかりやらなきゃいけないんじゃないかなと思っております。

・併せまして、いろいろな教育体制があると思いますが、あいサポート運動を15年間展開して参りま

した。その成果というのもあると思っておりますし、子どもたちの教育の場におきましても、障がいのあるなしにかかわらず、ともに生きていくこと、そのためのちょっとしたエチケット的な知恵或いは所作、そういうものも、わずかな時間で多分大丈夫だとは思うんですが、教育の中でも実践していただこうと目論んでおります。

・さらに国際化が進む中で、英語教育、外国語教育というのも重要でございます。これも高校の先生方は割と英語力もあるんですけれども、中学校の先生方が今ひとつかなというデータがあったりしまして、測り方もあるかもしれませんが、本県の中学生は、必ずしもパフォーマンスがよいということになっていないのではないかというデータもあります。ただ、ＡＬＴの数、外国語指導助手の数は、生徒あたり全国で一番多いです。だからうまくやれば、生きた教育を受けることができるはずでありまして、英語力というものも、しっかり確保することも可能なはずであります。うまくかみ合わせていくことが大切ではないかと思っております。

・そのようにいろいろな課題がございます。今年はねんりんピックの年でありまして、子どもたちがいろいろな世代の方々と交流したり、いろいろな地域とも交流できるチャンスでもあります。そうした時期をとらえたこともしっかり展開をして参りたいと思います。

・「子どもらや墨の手洗ふ梅のはな」という室生犀星さんの句があります。室生犀星は、石川県がふるさとでありまして、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」という名言も残していらっしゃる、ふるさと思いの方でもいらっしゃいました。今、能登において学校が再開をする、昔ふうに言えば、子どもたちが、書道したのか、墨で手が真っ黒になったもの、手を洗っている。そんなときに、今の季節、梅の花が咲いているという、そんな情景かなとも思います。ぜひ、学校現場を守り育てて、子どもたちの未来を一緒につくれるように、皆様のお力を賜りたくお願い申し上げます。本日はよろしくお願い申し上げます。

（中西部長）

・続きまして足羽教育長よりお願いいたします。

（足羽教育長）

・本日は平井知事をはじめ、有識者委員の皆様、また教育委員の皆様方、こうして久しぶりに対面で、この総合教育会議がありますことを本当に感謝申し上げます。ありがとうございます。

・今、冒頭平井知事の方からもありました。能登半島地震、本当に心を痛めておりますが、遠く離れた能登での出来事にとどまらないように、本県の子どもたちにも、かつて西部地震、中部地震があったように、今回の地震のことを、子どもたちがどのように受けとめ、今後も自分の命を守り、そして周りの人の命を守っていく、生活を守るという、そんなところに置き換えながら、ぜひ考える大きな契機にして欲しいということで、各市町村教育委員会や、学校の方にも投げかけをしているところであり、その中から子どもたちの自主的な活動も募金活動を含めて、たくさん見られるようになってきていることをうれしく思っているところでございます。ぜひ、可能な限りの支援を本県教育委員会としても、能登半島に届けて参りたいなというふうに思います。

・教育の課題につきましては、知事の方からもございましたが、学力の課題、或いは体力の課題、様々ございますが、これまでやってきた取り組みがどれぐらい本当に浸透しているのかどうか、またこの磨き上げに繋がっているのかどうかというところ、ここが大きな私ども課題意識を持っているところでございます。

・次々と施策を打てばいいではなく、その１つ１つが、子どもたちの学びや体力や、或いは情操をより育むためのもの、子どもたちに届くものになっているかということを、ご家庭、保護者の方も含めて、取り組みを進めていくこと。その意味では、焦点化していくことが、非常に大事だなと思っているところでございます。

・コロナ禍が明け、子どもたちも活動が戻りましたが、やはりこの３年間、体験的な部分が失われており非常に影響しているなということを、私どもも感じております。コロナ禍の前にただ戻るのではなく、このコロナ禍を経た、この３年を含めた新たな学びの創造や磨き上げというところにしっかり注力をして参りたいと思っておりますので、本日どうぞ忌憚のないご意見を賜りながら、１つ１つを確実なものとしていけるように取り組みを進めて参りたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

７　意見交換

（中西部長）

・意見交換に移ります。本日の議題は、資料に書いてあります通り、県の教育に関する大綱の改訂と、報告事項といたしまして、学力のことと、体力・運動能力のことについてでございます。

・最初に議題と報告事項を一括して、資料の説明をさせていただきたいと思います。では鳥取県の教育に関する大綱の改訂につきまして、総合教育推進課から説明をお願いいたします。

（藤田課長）

・資料は５ページに、教育に関する大綱の一部改訂についてとして整理しておりますので、こちらをお願いします。

・本県の教育大綱は４年ごとに策定し、４ヵ年間の中期的な取組方針と、毎年度の重点取組施策の二部構成としておりますが、第１編の中期的な取組方針には、ふるさとキャリア教育を強く進めていく旨を盛り込みます。学生の都会志向、大手志向の強まりも相まって、若者の県外流出が止まらない中にあって、鳥取に愛着を持ち、県外に進学・就職しても将来にわたりふるさと鳥取を思い、支えようとする意欲を養っていくこと、高大連携や学齢に応じたキャリア教育をしっかり進めていく旨を第１編に盛り込みます。

・第２編は、令和６年度の重点施策に改訂するとともに、目標値を達成した指標は引き上げ、改訂をします。表は、新規拡充する主な取組でございます。１つ目の学校教育の柱ですが、学力向上に関しては、この会議でも、データをしっかりと解析して施策に生かすべきとのご提言をいただいておりましたが、市町村や大学と連携し、解析データを基にした教育施策の立案に取り組みます。また、本年度からスタートした英検ＩＢＡにより、生徒の英語力を経年で把握分析し、指導と評価に生かす他、授業力を引き上げるよう各種研修会に取り組みます。令和８年度以降の県立高等学校のあり方は、まちづくりに直結するものであり、地域と連携して、抜本的な改革、基本計画の策定を進めます。

・２つ目の柱では、地域社会全体で子どもを育むことを念頭に、地元企業ともよく連携しながら、学齢に応じたキャリア教育を進めるほか、県内高等教育機関との高大連携を深めます。また、教育ポータルサイトへの企業情報の掲載、若手社員と高校生との交流機会の設定、インターンシップや講話などを通じて、優れた県内企業との接触機会を増大し、子どもたちの探究学習につなげます。

・３つ目の学びの環境づくりの柱では、不登校の相談窓口や学校以外の学びの受け皿の情報が十分に

届いていないとのご意見をいただいておりましたが、保護者が１人で悩みを抱え込むことのないよう、情報アクセス向上を図って参ります。また、令和６年４月に開校する県立夜間中学を展開しながら、体験授業を通じて、継続的なニーズの掘り起こしを進めて参ります。加えて、主体的に社会に参画する力を育成する主権者教育をさらに進展させるため、小、中、高、特別支援学校それぞれの発達段階に応じて、新たに教材を作成し、教科における指導や総合的な学習の時間に組み入れるなどして、主権者教育を進めます。

・４つ目の特別支援教育の充実では、１人１台端末を生かし、障がいの状態に応じて、ＩＣＴ活用による多様な学びを深めていきます。また、４月１日から民間事業者にも障がいのある人への合理的配慮の提供が義務化されますが、同様の理念で法よりも先にスタートしておりました、本県発祥のあいサポート運動の学習機会を、すべての小学生に提供し、あいサポートキッズの養成を進めるなど、子どもたちに“障がいを知り共に生きる”理念を伝えます。

・５つ目のスポーツ文化振興では、部活動地域移行の受け皿となる新たな地域クラブの立ち上げ支援をスタートさせる他、軽音楽など、子どもたちの興味関心に沿った音楽活動の発表機会を創設するなど、子どもたちの活躍を支援します。

・７ページから改訂案の全文を添付しておりますが、25 ページ、26 ページに指標一覧がございますので、そちらをお願いいたします。赤字で示しておりますのが改訂箇所で、25 ページ上から３つ目の学力レベルを伸ばした児童生徒の割合は、これまで教科ごとに目標値を設定しておりましたものを、教科の偏りなく学校全体でレベルアップに取り組み、小学校、中学校それぞれ全学年全教科で一定の目標値を設定することとします。また、中ほどの大学等進学率、英検準１級以上の英語科教員の割合など、実績が目標値を上回ったものは、目標値を引き上げ改訂いたします。説明は以上です。

（中西部長）

・続きまして報告事項の学力向上と、全国及び鳥取県の体力・運動能力について、教育委員会からよろしくお願いいたします。

（長谷川教育次長）

・まずは学力向上の取り組みについて、本年度実施した３つの学力調査と、それらを踏まえた学力向上の取り組みについて報告をさせていただきます。

・27 ページの資料２をご覧ください。まずは、例年実施をされています全国学力・学習状況調査について、この調査は、小学６年生、中学３年生を対象に実施をされ、教科について、本年度は例年の国語算数数学に加えて、中学校３年生の英語も実施をされました。調査の結果については（2）をご覧ください。

・国語算数数学については、おおむね全国との大きな差は見られていませんが、中学３年生の英語については全国に比べて大きく下回った状況でした。そういった中で、特に力を入れて取り組んできました、これからの時代に求められる学力である、思考力・判断力・表現力や、課題であった記述問題の正答率について、以前に比べて、全国平均を上回ったり、その差を縮めるなどの改善傾向にあります。一方英語については、また後程触れさせていただきますが、すべての中学校に指導主事が訪問し、授業改善に向けた指導を実施してきたところですが、学力向上というところまでは、まだまだ課題があると言えます。

・続いてとっとり学力・学習状況調査について、28 ページをご覧ください。こちらは本県独自の学力

調査で、小学４年生から中学３年生まで、国語、算数・数学の教科調査と質問紙の調査になります。この調査の特徴については、小学４年生以上の子どもたちが毎年実施をすることによって、いわゆる子どもたち一人一人の学力の伸びを経年で見ていこうというもの、そしてもう１つ、学力を支える、非認知能力の状況を見ていこうという調査となります。その結果につきましては、①から③の表をご覧ください。概ねどの学年も学力を伸ばしていますが、例えば、昨年度と比べ国語の伸びが大きかったり、また少し心配しておりました昨年度の小学４年生が１年間かけて大きく学力を伸ばしている状況も見られました。また、29 ページの質問紙の結果から見えてくる非認知能力につきましては、学力との関係が深いと言われています自己効力感が昨年度に比べてやや高くなっている一方で、学年が上がるにつれて低下していく傾向にあるなどの課題も見られています。

・次に、英検ＩＢＡの結果につきまして、30 ページをご覧ください。この英検ＩＢＡは英語能力を判定するための調査で、スコアに応じて、例えば、英検３級相当といったようなことが判定されるものです。本年度より、英検協会とも連携をして、中学３年生で４技能型、中１、中２は２技能型の調査を実施しました。その結果につきまして、(2) に表で示しておりますが、中３で英検３級レベルの生徒が約 50%というふうな結果となりました。この英検３級レベルというのが、国が中学卒業段階で１つの目安としているところですが、今回客観性のある調査を実施させていただいたことによって、子どもたちの実態をより正確に把握することができたと思います。この調査の結果から、即興で答えるスピーキングの問題や、自分の考えなどを書く問題の正答率が高い一方で、例えば長文読解であったり、文法などに課題があるといった状況が見られました。これらの状況は、先ほどの全国学力・学習状況調査の英語の結果からも同様な課題が見られているところです。引き続き英検協会とも連携をして、今回の調査結果を踏まえた分析やアドバイスもいただきながら、県内すべての中学校を指導主事が訪問し、授業改善に取り組んでいきたいと思います。また、ＡＬＴの活用、オンライン英会話など話すことへの取り組みを市町村とも一緒になって進めていくとともに、教員の英語力の向上に関して、大綱の中にもあります、英検準一級レベルの英語力を持つ教員を増やしていけるように、受験の奨励や教員採用なども含め、取り組みを進めて参りたいと思います。そしてこれらの調査結果を踏まえ、来年度の学力向上の取り組みとなりますが、31 ページをご覧ください。まずは、こういった教育データをしっかりと分析、活用していくため、大学等とも連携を図っていきたいと思います。そしてそういった専門家にも加わっていただきながら、学力向上検討会議を開催し、いろいろな角度からご意見をいただきながら、学力向上に向けた取り組みを推進していく予定です。また、個別最適な学びを実現していくため、１人１台端末の活用など、教育におけるＤＸをさらに加速させていきたいというふうに思っております。

・続いて体力・運動能力に関する調査の結果につきまして、33 ページをご覧ください。まずは、全国体力・運動能力、運動習慣等調査についてです。この調査は、小学５年生、中学２年生を対象に実施をしているものですが、(2) の表をご覧いただきますと、本県の体力合計点としましては、全国の中でも上位にあります。ただ実際のところ、35 ページの資料１の上段の表あたりを見ていただくとわかるのですが、例えば令和元年度の本県と比較をしますと、子どもたちの体力自体は、以前に比べて低下傾向にある状況となります。また、朝食を食べなかったり、肥満傾向の子どもたちが増えているということも課題となっております。

・次に本県が独自に実施をしております鳥取県体力・運動能力調査について 34 ページをご覧ください。

この調査は、小学１年生から高校３年生までを、先ほどの全国調査とほぼ同じ内容で実施をしまして、経年での変化を見ていこうというものです。その具体は 36 ページ以降に掲載をしていますが、先ほども述べさせていただきましたが、例えば、握力であるとか、上体起こし、20 メートルシャトルランなど、年々低下傾向が見られています。その要因としまして、例えば、生活様式の変化の中で、筋力をあまり必要としない生活環境への慣れであるとか、全体的な運動量の減少などが、基礎体力の低下に繋がっているのではないかと考えております。また、年齢が上がるにつれて、テレビであるとかスマホの利用時間も長くなる傾向がありまして、そういったことも体力への影響があると考えています。そういったことも含めまして、今後の取り組みですが、こういった調査結果を活用して、子どもたち自身が自らの運動や生活習慣について考える保健学習に取り組んだり、学校以外でも運動に取り組みたくなるような工夫や、幼児期から楽しく体を動かすことの大切さを啓発していくなど、家庭や地域でも取り組みを進めるような働きかけを進めて参りたいと思います。

（中西部長）

・ただいま説明いたしました議案と報告事項につきまして、まず有識者委員の皆様からご意見を伺いたいと思います。発言は概ね５分程度でお願いしたいと思います。

（有識者委員）

・これまでの会議での意見を、今回いろいろな施策に反映していただいて大変感謝しています。知事のお話にもあったように、学力向上の件についても、しっかりデータを取っていただいて、検証していこうという、当局のすごい熱意が感じられて大変ありがたいと思っています。ふるさと教育、ふるさとを愛する教育について、この間、YouTuber のスーツ旅行さんの動画が 33 万回再生されていました。その方が、本当に鳥取県の魅力を YouTube で発信されたら、鳥取県民からのコメントがすごい多いんですよね。ありがとうとか、自分でも知らなかったとか、すごく嬉しいとか、やっぱり外の人から鳥取県のことを取り上げてもらうってこんなにいいことなんだなあとその時思いました。乗り鉄の YouTuber の方も最近は鳥取県の路線のことをいろいろ紹介していて、全国的にも、こういう発信ができれば、鳥取に住んでいる子どもたちも、僕たちが住んでいるところはすごくいいんだと感じてくれるのかなと思いましたので、やっぱりいろんな発信の場を使って鳥取県の良さをもっともっと内外に発信していければいいのかなと思っています。

・今回、本当にいろいろな面でまた一歩進んだなという感じがして、感謝なんですけど、3 点程度、お話したいと思います。1 点目は、幼保小連携のところです。幼保小連携についての取組を入れられたということで、これまでもされてたんですけど、とてもいいなと思っています。鳥取県でも５歳児健診をやっていると思うんですが、そこでの課題は、そこで挙がった情報の共有が、どんなふうに学校に伝わっているか、あるいは伝わったとしてその後どういう支援につながっているかという、そのシステムがよくわからないという声が上がっていたと思います。今後、まだ５歳児健診は始まったばかりなので、そういうところがうまく幼保小連携の中で生かされていけばいいなと思っています。切れ目のない幼保小連携というところで、子どもたちが 1 年生に上がったときに、うまく適用できるようになると、早めの支援っていうのがやっぱり学力向上にも繋がってくると思うので、そういうところで早めにデータを取ってそこからどんな支援が子どもに必要なのかというところを考えていくという流れにしていくといいなと思っています。

・それから２点目ですが、いろいろなアイデアがきちんと反映されていて、いいなと思うんですけど、

これをやってる先生方ですね、現場の先生方がたくさんの課題をこなしていくのに、忙しくなり過ぎていないかなっていうので、県の教育委員会の皆さん或いは指導主事の皆さんも働き方改革は大丈夫かという心配もあるわけですね。だから、その中で捨てていくもの、整理していくものをきちんと考えていただきたいなと思います。足羽教育長さんもおっしゃったように、やはりどこに焦点を当てていくかというのを明確にされるといいんじゃないかなと思っているところです。

・３点目は、一人一人に寄り添い多様なニーズに対応した特別支援というのと、もう 1 つは誰一人取り残さないという大きい項目があるんですが、インクルーシブ教育とどんな関係があるのかなとか、やはりその点で 1 つ整理する視点があるんじゃなかろうかと思うんですね。障がいのあるなしにかかわらずと知事さんがおっしゃったように、共に学ぶ場があってこそ、触れ合いがあってこそ、お互いの立場や自分とは違う人との理解っていうのが進むんじゃないかなと思ってますので、これは少し先の話になると思うんですが、ぜひ今後検討していただきたいなと思っている次第です。

（有識者委員）

・私の方から何点かお伝えしたいと思います。まず 14 ページ、教員の安定的な確保についてですが、現場はすごく苦戦しています。これは私立もそうですし、おそらく公立もそうなんじゃないかなと思っておりますので、教員の確保については、もっと具体的な施策を講じていただきたい。例えば、公立も私立もアクセスできるような教員の人材バンクを作るとか、あと特別免許を使った採用ですね。免許を持っていなくても専門的な者であれば、そこに特別免許をつけて、教壇に立ってもらう。これは文部科学省も、それを推進していくようにと言っておりますので、ぜひそこをもっと拡大していただければなと思っております。

・次、15 ページに教育のＤＸとあります。ＩＣＴを使った新しい様々な取組、データサイエンスだったりＡＩだったり、やっていこうということが大綱全体に書かれてありますので、非常に期待できるなと思いますが、新しいことを始める一方で、やはり何を止める、何を削る、減らすというのも同じぐらい大切なことかと思います。その辺り具体的に県の方から方針を示していただけるといいんじゃないかなと思います。ＩＣＴの Ｃ はコミュニケーションのＣですので、やはり、相手があることですから、学校任せになかなかできない、学校の判断でなかなかできませんので、県から発信していただけるといいなと。昨年末、政府から、学校現場でファックスの利用を廃止するという方針が出たと思いますけれども、そういった大胆な方針が、県から出していただけると嬉しいなと。ファックス、電話、郵便、あと Ｅ メールですね、これらを手段とするやりとりの中で必要ないものをぜひ洗い出していただいて、これはもう止めようというのを強く発信していただけると非常に嬉しいです。

・それから同じく 15 ページの英語教育について、4 技能をバランスよく生徒につけさせるということで、様々な指針が書かれておりますが、4 技能の指導で大切なのは、おそらくその教員自体の持つ英語力と、そしてその教員の指導力だと思うんですが、高校の先生の方は、準１級の取得率がすでに 99％ということで指標が 100％に上方修正されておりますが、もう準１級は目標にしなくていいんじゃないかなと思っていまして、次の新しい目標を作らなければいけないんじゃないかなと。そうしたときに、短絡的にじゃあ次は英検 1 級の取得率にしようとするのではなくて、例えば、CEFR(セファール)を基準に考え直してみたり、国際的な CELTA（セルタ）とか CELT-S（セルト-エス）とか、そういった教授法を持っている割合にしたり、そういった方に変換していった方がいいんじゃないかなと思っております。中学校の先生についても同様のことが言えるんですけれども、中学校の先

生の方は、準１級の取得率が 33.5%というところで低いんじゃないかなというのがあります。中学生に３級 50%という目標を課すのであれば、ぜひ中学校の先生の方も、頑張って英語力を上げて欲しいなと思っております。一緒に英検受験しようとか、そういう働きかけが必要なんじゃないかなと。本校でもデータサイエンスをやるにあたって数年前から統計検定の受験を始めたんですけれども、生徒に受けてもらうために私も受験しました。校長が受験するってなったら生徒も受けますよね。ですから、現場の先生たちも私が準１級受けるからみんなも３級受けようよみたいな、そういう雰囲気づくりで一緒に受験して、双方の合格率を上げていくと良いと思っています。

・あと、様々な研修を計画されていますが、やはり 4 技能の指導については民間企業の方が先行していると思いますので、ぜひそういった英語４技能の指導に特化した民間企業と一緒に組んでですね、研修カリキュラム開発をされたらどうかなと思っております。

・次のページの国際バカロレアについては、今指標の中に難関国公立大学の合格者数 120 名という指標がありますが、国際バカロレアの一期生が令和７年度に卒業して実績が出てくるんじゃないかと思っておりまして、令和７年度には、海外大の合格実績の指標も加えるか検討をすべきと思っております。

（有識者委員）

・私は PTA 協議会に入ってからこういう大綱とか、教育に関するものをよく見ることになったんですけれども、やはり保護者はなかなかこういうものを目にする機会はないと思っております。素晴らしい大綱があるんですけれども、ＰＴＡにあまり関わってない保護者などはこういう取組をされていること自体、わかっておられない方が多いと思っております。

・特に 11 ページの不登校に関することなんですけれども、学校以外の選択肢となる学びの受け皿があることが周知されていないとあります。本当にその通りだと思います。不登校って突然やってくるものだと思うんですけれども、保護者はやっぱり慌ててしまいます。子どもがもし不登校になってしまったら、まず学校に問い詰めてしまうと思うんです。なぜ不登校になったのか。学校が悪いのか、何かクラスであったのかっていうことを一番に考えてしまうと思うんです。まず学校に行くことは大切なんですけれども、でも、やはりこういうフリースクールや学びの場、受け皿があるってことを知っていれば、子どもにとって何が一番いいかを親が考える余裕ができます。１人で悩まずに相談できるところがあるっていうのを、もっともっとＰＴＡとしては発信していく必要があるなと思いました。

・２つ目に、20 ページのふるさと教育についてです。コロナ禍で、人とのつながりとか、個々とのつながりがなかなかできなくて、今コロナは５類になりましたけど、足羽教育長さんもおっしゃっていましたが、大人はコロナの前に戻ることはできますけど、子どもはコロナ前のことがわかってない。コロナ前に戻そうとしても、コロナ前がどうだったのか。例えば、３年生でコロナを経験して、その時の６年生がどうだったのかっていうのがわかってないなと思っています。こういう６年生になりたいっていうのを経験せずに今６年生になってしまっていたり、難しいことは言えないんですけど、コロナ前の当たり前だったことが、今は当たり前じゃない、そういう意識を持って大人も接していくべきだと思っております。

・最後に、23 ページの３番に中学校部活動の地域移行を見据えたスポーツ・芸術活動の充実とあります。今、地域移行で部活がなくなるっていう情報だけが先行していて、将来的に部活がなくなる、じ

ゃあクラブに行くのか。そういう情報だけが先行していて、正確な情報がなかなか保護者の方に入ってきていないというのが現実だと思います。焦ってクラブに入るけど、結局クラブも人数が足りない、部活も人数が足りない。部活とクラブとの間で人の取り合いになっていたり、そういうのが現実にはあると思うので、もっともっと、正確な情報というものを発信していただく必要があるのかなと思っております。

・今日参加させていただいて、やはりこういうすばらしい大綱とか、こういうことがあるということをもっともっと発信していく必要があると思いましたので、このような場に参加させていただいて本当にありがたく思っております。

（有識者委員）

・私の方からは、教育系以外でいくと多分唯一の企業経営者ということになるかなと思うので、企業目線でお話させていただければと思っています。まず、17 ページの 1 番と 7 番のところに関わってきますけれども、子どもたちが、鳥取の魅力を知り、鳥取に残って活躍していきたいというふうにまず思ってもらうために、これ質問になってしまうんですけど、子どもたち側からして、なぜ鳥取にいなくて県外に出ていきたいと思ってしまうのかとか、逆になぜ鳥取にその魅力を感じないのか、鳥取を何とか盛り上げていきたいというような意思が浮かばないのか、生まれないのかっていうところを、アンケートとかも含めて、どういうふうに考えてるのかっていうのは 1 回知りたいなと思っています。

・私自身も今、任意団体で経営者がおよそ 10 社ぐらいなんですけど、学校訪問するようにして、中学、高校、大学全部行けるところに行って、授業の中で経営者と、学生、生徒っていうところで交流しているんですけど、そんなに悪い感じはしていないんですよね。結構みんな楽しそうに話を聞いてるし、質問も結構出たりとかして、思ってたよりは結構積極的だなっていうイメージがあって、だけど最終的には結局県外に出て行っている状況があると思うんで、この辺の何かアンケート含め実態を知りたいなっていうのが 1 つ。

・もう 1 つは 7 番にもつながるところなんですけど、学生も、まず、なぜ県外に行くのかっていうことも含めて、状況、意見っていうのをしっかりとアンケートなりで知りたいっていうのと、あと鳥取県として、県内のＵターン就職率っていうところを、今 39%というふうにおいているんですけど、これを具体的にどのくらいにこうしていきたいかということと、あと全国比的に見たとき、特に地方ですけど、そのＵターン率が、鳥取県は低いのか、それとも高いのかというところもウォッチしていった方がいいのかなと思います。

・今回、県内の教育のところで話がそれてしまうかもしれないんですけど、逆に鳥取県としては、いわゆる県外から来ている大学生とか、そもそも県外の大学にいる学生の皆さんをいかに鳥取県の中に呼び込んで就職してもらうかって、同時にやっていった方が私はいいと思っていて、私も感じてるんですけど、やっぱり大学生とかでも、地域のことを今一生懸命やっている学生って大半が県外から鳥取の大学に来ている子たちで、実際、鳥取の子がもちろんいるんですけど、割合でいうと少ないと感じていて、つまりは県外から来た人たちの方が、実は鳥取県の魅力ってわかりやすくて、言い方変えるとハマりやすいんですよね。私もハマっている側なんですけど、鳥取県のことが好きになって鳥取県を一生懸命盛り上げていきたいっていうような感情が湧いているので、そういった側面も含めて両面でやっていく必要があるので、その辺をまたご検討いただいて、もし答えがあれば教えていただ

きたいなと思っております。

（有識者委員）

・この大綱の中にあるだけでも、先生方はすごくたくさんの課題を意識しながら、本当にコツコツと、こっちも注意し、こっちも心がけ、多方面にわたって学力のことも体力のことも家庭背景のこともたくさん思い悩みながら、毎日子どもの目の前で授業を展開しないといけない。さらには、早く帰宅するよう促されるような状況の中で本当に頑張ってくださっているなと思います。その先生方を、こういった大綱で、応援できるといいと思います。

・具体的にですが、11 ページの大項目「誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す学びの環境づくり」の中で、可能性を引き出すという点で、本当に子どもたちって可能性の塊だなと思うのですが、それをどんなふうに引き出し、どんなふうに見つけていくのか、現場の先生たちがどう工夫しているのか。きっとうまくいっている例がたくさんあると思うんですけれど、それをみんなで分かち合い、共有することもあるといいかなと思います。そしてその可能性については、先生方にも大いなる可能性があるので、先生同士で可能性を引き出し合えたり、学校としての可能性を引き出すことができていくといいんじゃないかと常々思っています。

・不登校の課題、多様な学びの場についてですが、まず、学ぶ場は学校でなくてもいいんだよ、ということが広まった一方で、不登校率が上がり、数字に表れてくる。学校の現場の先生は、「不登校率は下げないといけない」でも、「学び方はいろいろでいいよ」というジレンマの真っ只中におられると思います。ですので、この選択肢が増えたということを、みんながそれでいいよねと、学校の先生も保護者も、そして子ども本人も、選択肢がいっぱいあるところから選んでいいんだよねという、合意形成というか土台として雰囲気が育ってくると、安心して選べるということにつながるんじゃないかなと日々の学校訪問などで感じています。

・学校という場所、学校での教育というのは一体何なのか、本質的に一体学校って何だろう、教育って何だろうということについて、今一度考えていく時期なのかなという気がしています。協力の仕方を学ぶ場所、学力向上はもちろんそうだけれども、29 ページの調査結果、学力向上と非認知能力のところで、自己肯定感が学年が上がるにつれて下がっていくことと、学力向上って関係あるんじゃないかなっていうことが数値に出て、先生たちは感覚的にも何か感じているものがあると思います。自己肯定感とか自己効力感って一体何なんだろうとか、子どもがそれを育むことができるように、大人の側、先生方も、保護者もどんなふうに育んでいくとよいのか、子どもたちにも届いていくのかっていうことを、数値をきっかけに、現場で考えていけるといいのかなと感じています。

・もう１つ、14 ページのところで、保小中の連携が、もうちょっといい具合になっていくといいよねっていう意見があったんですが、保小も小中も割と丁寧に情報を引き継いでいただいています。ただ、これは未然防止に繋がることで、何か起こる前に手立てができるよっていうことだと思うので、いただいた情報をどう使うか、その情報をもとにした一手を作る仕組を作り、工夫してうまくいってることがあれば共有して広まったらいいし、うまくいかないなということがあれば、どうシステムを作ったらいいのか工夫し、そこから更につなげていけたらいいのかなと思いました。

（有識者委員）

・私は英会話の講師としての視点から、英語関連、英検ＩＢＡとか、英検のことを 30 ページ中心に述べさせていただけたらと思います。まず結果の方を拝見しますと、技能別の結果等のところで、リス

ニングは、合格基準に達してるってことだったんですけども、一番低いところが、ライティングっていうのはやっぱりそうかなと個人的に思いました。ライティングって一番難しいと言われておりまして、英会話スクールにいらっしゃる方とかも、読み書きは結構できるんだけど、しゃべる方はね、と仰る方がすごく多いんですが、実は結構そのライティングの難しさに気づいていらっしゃらない方、これ学生もそうなんですけど、多いなと思っておりまして、これをやっぱり練習していくためには、この導入された英検ＩＢＡのテストっていうのを積極的に受けていただくことはすごいいいのかなと思います。この英検ＩＢＡっていうのは価格もかなり安価で、リーズナブルな価格で時間も確か 45 分というかなり短い時間で受けられます。通常の英検でしたら級が上がるごとに時間が長くなっていて、しかも準１級ぐらいになるともう 2 時間ぐらいあるテストなんですけども、英検ＩＢＡは級関係なく短時間で受けられるので、積極的にそういう機会を増やしていただいて、そのライティングの練習をできる場を増やしていくのがいいかなとは思います。

・また通常の英検の方なんですけども、今年度おそらく５月、６月に開催される分からライティングが変更されることが発表されており、今まででしたら、意見論述のライティングの問題が１個どんとあって、それが英検の素点で言うと 16 点満点。これがＣＳＥに換算されるっていうことだったんですけども、これが２級と準１級に要約問題が入ってきて、準２級と３級はＥメール問題が入ってくるっていうことなので、そういうのに考慮すると、やっぱりこの英検ＩＢＡをどんどん受けて慣れていただくことはいいかなとは思います。

・また英検では、来年度新たな級が新設され、２級と準２級の間に準２級プラスというものが導入されると発表されております。これは準２級と２級の間って名称だけ見るとそんなに離れてなさそうに見えるんですけど、意外とギャップが大きく、準２級ぎりぎり受かった子が、２級はまだハードルが高いんでしばらく勉強してから受けようと、期間がちょっと空いてるうちに、モチベーション下がったりするとか、逆に準２級ぎりぎり受かったけど、とりあえず落ちてもいいんでやってみますっていう、モチベーションが高い子でも、何度も２級を落ちていくとどんどんモチベーションが下がっていってしまいます。それがこの新しい準２級プラスという級が新設されて、合格点もちょうど現在の準２級と２級の間ぐらいになるとのことなので、より気軽に受けられて、モチベーションも保ちやすいのかなとは思っております。

・現在の大学入学共通テストのことを踏まえますと、以前のセンター試験に比べまして、出てくる単語数とか量もかなり多くなっておりますので、今まで以上に速読の力だったりとか、情報処理する力だったりと、判断力、理解力っていうのが必要になっていきます。私も先日の分をやってみたんですけど、長文が結構量が多くて、時間内に解き切るにはやはり２級はどうしても必要なのかなと、欲を言えば準１級ぐらいあった方がいいのかなっていうぐらいレベルも難しいかなと思いますんで、そういうのも踏まえて、英検ＩＢＡとか、英検の級も新設されるので生徒の皆さんには積極的に受けて、試験慣れして大学入学共通テストまでスムーズにいけるようになってもらえるといいかなと思います。

・あと、冒頭の平井知事のご挨拶の方でＡＬＴの数が、生徒１人当たり換算すると鳥取県が多いということがありましたので、せっかくこういった大変恵まれた環境に子どもたちはあると思いますので、例えば休日に、ＡＬＴの先生何人かと鳥取の名所をめぐるツアーみたいな企画をして、例えば鳥取砂丘に行ったことのある子でも、それを英語で何か表現することによっていい練習だったり刺激にも

なると思いますし、また鳥取の魅力を若いうちからしっかりと知ってもらうことで、その定住化、県外流出を防ぐこともできるんじゃないかなと期待しております。

（有識者委員）

・私からは主に９ページのところの、主体的に学ぶこと、働き方改革について意見させていただきます。現在、私の塾では、小学校が２校、中高６校ずつからお通いいただいています。その中で感じることは、多くの学校で、どの生徒も同じ決められた宿題が出ている点です。勉強が得意な生徒も苦手な生徒も、一律の同じ宿題なため、できる生徒にとってはいいですが、苦手な生徒にとっては、特に数学においてですが、この宿題をやるためには少し戻って基礎をかためてからやる必要があるのに現状では難しく、期限もあるため、自信もなかなかついていかないという状況があるかなと思っています。ですので、宿題の面から言うと、一人一人に寄り添っているとは必ずしも言えないような状況かなと思います。

・そこで先ず、先ほど整理というお話もあったのですが、宿題を変えていってはどうかなというふうに思っています。具体的に申し上げると、テストの結果から、次のテストなどに向けて、生徒自身が宿題の計画を立てて、それを実行、分析、改善を繰り返す。大人がやっているようなＰＤＣＡサイクルを、大人になってからではなくて、もう今のうちから実践することで、成績アップももちろんですが、自ら考え行動できる、ここにある社会の作り手っていうのを育むことができるかなと思ってます。

・18 ページにある、家で計画を立てて勉強しているっていう生徒、高校になるとなかなか上がってないなと思ってびっくりしたのですが、やっぱり難関大とかを目指すってなると、ここはしっかり自分でも自走しながら計画を立てていくっていうことが大前提必要になってくると思いますし、29 ページにある、自己効力感というところは、自分のサイクルをしっかりまわしていって、自分の計画が実行できる、小さなできる、小さな成功体験っていうのを積み重ねることで、自信がどんどんついていくんじゃないかなというふうに思います。また、国語力っていうのはすごく上げるの難しいかなと感じているんですけど、言語化すること、自分のやりたい目標とかにも言語化する、自分の考えとかを要約するというのが国語力を上げる基礎、一番の近道かなと思っているので、それも取り組むきっかけになるんじゃないかなと思います。宿題を変えるってすごい大幅な改革かなと思いますし、先生側からしたら、最初こそ認知とか、実行、徹底とかも大変かもしれませんが、宿題の作成だったりとか、丸付けの時間とかも短縮されて、教育っていうのは「教える」っていうティーチングと「育てる」っていうコーチングで成り立っていると思ってるんですけども、そのより「育てる」という部分に注力ができるんじゃないかなというふうに思っています。その結果、一人一人に寄り添うっていうことに近づけるんじゃないかなと思ってます。

・さらに、その宿題にＩＣＴっていうのを組み込んでいくと、どの問題をやったか、その問題の結果、正答率っていうのが、生徒ももちろんですし、先生が学校側とかと共有できると思うので、よりいいサイクルが生まれていくんじゃないかなというふうに思っています。その自分の計画を立てるっていう時間は、なかなか作りづらいかもしれないんですけど、授業の５分とか、境目とかの中で、班ごととか、ゆくゆく個別でもできるようになったら、より良いかなあと思うんですけども、自分自身で考え、行動できるっていうところを取り組んではどうかなというふうに思います。例えば、小学５年生からいきなり全部は決められないんですけど、いついつぐらいテストがあるっていう時に逆算を

して、じゃあここまでは進めないといけないよねっていうふうに少し教えると、今週はこれぐらいやろうかなと、もう自走ができるので、それは中学生や高校生も大分できるんじゃないかなというふうに思っています。

・あともう 1 点。宿題もそうなんですけど、やっぱりテストにすごい差、地域差もあると感じています。もう本当に間に合わなくて、今日終わって次の日テストとかっていうこともあったりとかして、一方、他の学校では基礎問題とかはもう余裕で進んでいて、発展問題までいって、でもテスト自体が難しくなっているところもあるため、テストもちょっと思い切って一律にするっていうのも、1つあるのかなと思っています。そうすることで、学校とか方針もあって、これも難しいかなと思うんですけど、特に公立の中学校で、テストの時期と内容を一律にすると、その同じデータ、母数が増えるので、先生自身の授業力のフィードバックにもなりますし、生徒側からしても、みんな同じテストに取り組んでいるので、その問題自体の正答率のデータっていうのも取り入れて、その結果を見て、自分がどうやって考えていったらいいか、どこを伸ばしたらいいかっていうのがより明確になるかなと思います。

・もっと言うと、例えば、教科とか大問ごとに各学校が持ち回りにすることで、多分普通はそれぞれの学校が全部テストを作って大変かなと思うんですけど、その負担が軽減されるんじゃないかなと思うので、業務効率化とか、その部分を指導力の向上に当てられるんじゃないかなと思います。

・あと英語のこともなんですけど、もちろん中学校と高校でもすごい英語っていうのが大事なんですけど、一番大事なのは中1、その前段階の小学校かなと思っています。昔は中1の英語の教科書のスタートが、アルファベットが書けて、自分のローマ字が書けたら、大体 100 点ぐらいだったんですけど、ユニットの1、最初のところで、be 動詞とか一般動詞、あと can とかまで出てくるようなすごい難しくなっていて、右隅にちらっと小学校で習った英単語っていうふうに載ってるだけで、もう知ってますよね、書けますよね、読めますよねっていう状態で始まっていくので、もう小学校からの接続がすごい大事で、中1の6月までに what とか疑問詞とかも出てくるので、もういきなりつまずいてしまったら、単なるつまずきではなくて、結構、交通事故ぐらいの大けがになってしまう。やっぱり苦手になって英検取得も低くなっていくという流れになっているんじゃないかなと感じています。お話あったのですが大学入試、高校入試もすごく変わっています。基礎力、基礎学力はもちろん、思考力とか判断力っていうのがすごく求められる時代に変わっています。宿題とかテストを変えるっていうことが学力向上、そして変化に対応し主体的に学び、かつ、働き方も改善でき、先生になるなら鳥取県というふうに言ってもらえるような策であるかなと少し思っております。

（中西部長）

・続きまして、教育委員からご発言をお願いいたします。

（教育委員）

・本日はたくさんご意見を聞かせていただきまして本当にありがとうございます。委員としての期間が短くて、この議論にはほとんど入れていない状態でございますので、個人的な意見も含めて、教育委員の立場とはちょっと違うよと言われるようなこともあるかもわかりませんが、3つばかりお話させていただければと思います。

・まず1つ目は、冒頭の知事のお話にも、それから委員の皆様からもいただいた「ふるさとキャリア教育」についてです。人材育成という意味からも、また子どもたちが本当に夢や希望を持って意欲的に

学んでいくっていうことを期待する上でも、この視点というのはこれから本当に大切になってくると思っています。担当課の方でもいろいろと苦心して、子どもたちと産業界、企業の方とつないで、いろんな体験ができるようにされ、とてもいいことだと思っています。実は大学の方でも、鳥取のこどもたちにできるだけ早くに、県内でどんな学びができるのか、それがどんな仕事、職業につながっていくのかということを知って欲しいなという思いから、来月、鳥取看護大学と短大とで、中学生向けのオープンキャンパスをやってみようということにしております。そうして、産業界からも或いは教育の方からも子どもたちに知ってもらって、鳥取でこんなことができるんだなと夢を持ってもらえるようなことにしていきたいと思っております。

・２つ目は、中学校の休日の部活の地域移行の件なんですけれど。実は昨日まで、これにも関係する中四国の会に出ていたものですから。日頃、担当課の方では本当に一生懸命この体制づくりに向けて手をくだいていただいてるということを聞いておりますけれど、その情報発信が足りないんじゃないかなっていうのは感じています。この部活の体制を変えるっていうのは、学校教育を中心に発達してきた部活ですので、とても難しいことです。各県とも苦労して、この体制づくりをどうやっていくかっていうことで、本当に大検討しておられます。それぞれの市によっても、町によっても状況が全然異なり、指導者がいたりいなかったりということですから、それぞれに合わせたやり方を工夫していかないといけません。例えば、鳥取県で一律に、さあ準備できました、スタートしましょうなんていうことにはなりえない。その辺りも、やっぱり教育委員会、行政の方からぐっと地域のスポーツクラブに働きかけたり、スポーツ少年団に働きかけたりしながら、本当に充実した活動ができる方法をみんなで検討し、中学生を受け入れ、一緒にやっていこうっていう雰囲気を作らないと難しいことだと思っています。保護者の方が、そんなふうに思っておられるっていうのも今伺って、やはり完璧に体制が整わなくても、「今こんなふうに進めています、今こんな状況にあります」っていう情報を届けていかないといけないなとつくづく感じました。これは教育委員会だけでできることではないし、まして、スポーツ協会だけでできるようなことでもなく、やはり皆で連携していかないといけないことだと思っています。

・もう１つは、お話には出てこなかったんですが、私が最初にこの大綱を見たときに感じたことなんですけれど、それぞれの指標項目に対して、指標が提示されているわけですけれど、私が違和感を持ったのは、指標として数値ではなくて「全国平均を上回る」とか「下回る」という表現になっているところです。理由は何となくわかります。数値には表しにくい項目だっていうことも、感じるところなんですけれど。ただ、特にこういう教育分野でありながら、相対評価的な指標が出てくるっていうことに、どうかなっていう印象を持ちました。これは、個人的な意見として届けたいと思っております。

（教育委員）

・本日は皆様大変貴重なご意見、それぞれのお立場で本当にありがとうございました。今日、私の方からお伝えしておきたいなと思うこと、共有したいなと思うことが一つございます。皆様、30 年程前に中学校を卒業した鳥取県の子どもの数はご存じでしょうか。県全体で 9,000 人のお子さんが卒業しています。そして、一昨年生まれた、15 年後に高校に上がってくるお子さんの数はご存じでしょうか。県も公表しておりますので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、4,000 人を切りました。3,000 人台となっております。これ県全土でです。この数値といいますのは、非常に重要というより

は危機感を感じる数字でございます。人といいますのは重要な話より、危機感に非常に行動が変容しますので、やはりこういった数値というのは、皆さんもっと知っていただくことにならないといけないなと思います。私自身も、昨日ですけれども、鳥大の先生や文化財団、環境大学の先生などと数名ですけれども勉強会をいたしました。その中でこの数値をお話したところ、本当に愕然としていらっしゃいました。今まで話をしていた課題はさておき、この 15 年後の学校の問題も含め、この激減している現状、まずこれを事実としてとらえていかなければならないという未来型の思考ですね。やはり教育に対する未来型の思考と、今考えなくてはいけない、現在の立ち位置での考えなくてはいけない課題、これはやはり二局で、今風にいいますと二刀流で、両方思考していかなければならない時代が来ているということを、本当に非常に強く感じていただいたなという感触を得ております。今後もまだまだこういった数値から出てくる危機感というのは、良くも悪くもあると思いますので、数値を知るというのは非常に大事だなと私自身も最近強く感じておる次第でございます。

・そして、社会の実像、知事からもお話ございましたけれども、本当に実像の中で私も現場におりますので、本当にお子さんたちが鳥取に残って働いてくれたらいいなと実感、体感しております。そんな中でですね、高校生の職業マッチング、大学生に対しては、企業説明会、紹介フェアというのが、各地でなされますけれども、高校生とのマッチング、企業とのマッチングというのは、実はまだまだハードルが高うございまして、学校が間に入ってくださる企業見学というのがありますけれども、お子さんたちが、そのフェアのような形で見る機会というのが全くない現状だと思われますので、高校生、保護者の方たちに向けてでも、企業の紹介説明フェアみたいなものがあって、そして、大学に進学する子も、そこで地元で就職したい子も、専門学校に行きたい子も、そういったたくさんで集って、がやがやとやるような、企業の説明会のようなところで鳥取県のよさを感じる。そして、そこで新人のスタッフの方たちが自分たちの会社を意気揚々と説明するというような光景が生まれますと、どちらにとっても、非常に人材育成にもなりますし、子どもたちにとっても憧れのロールモデルの先輩たちを見る機会になるのではないかなと感じております。私どもはそういったことを常に課題と思っておりますので、教育委員会の中に入り、しっかり皆様のご意見聞きながら、活かしていきたいなと思っております。

（教育委員）

・今日も非常に多岐にわたるご意見いただき、本当にありがとうございます。まず、大綱とかいろんな教育行政についての周知という話をいただきました。言われればその通りだなあと思ってですね、なかなかこれだけのものをＷｅｂサイトに出てるから読んでよって言っても読めないっていう方が大半なのかなと思います。今、正直言って、私もどういう形で周知されてるのかってつぶさにはわからないところがあるので、間違っていたら教育長、直していただけたらと思いますが、例えば小学校、中学校、高校なりの段階に合わせて、この大綱をブレイクダウンしたものっていうのをしっかりと皆さんにわかっていただくっていうことも、すごく大事なのかなあと思います。ややもすると、教育とか学校っていうものと、一般の社会っていうものが、二極的にとらえてしまえば「あいつらはわかってなくて」っていうような人間関係が発生しがちですし、特に不登校とかですね、少し混乱した事態になると、そういうことが事態を良くなる方向に導いてくるとかっていうこともありますので、その辺のところは、改めて、どういうことができてるのかなってことを教育委員会内でも、確保できたらなと思った次第です。

・それから、鳥取の人口減の話があって、これも本当に深刻な問題だなあと思います。先ほど鳥取の魅力の話があって、ふるさとキャリア教育等を通じて鳥取の魅力を出していくっていうこと。それは、全く必要なことだなと思います。私なんかも、いまだに知らないことがたくさんあります。ただ、一方で難しいのは、その鳥取に魅力がないんではなくて、その若い人にとって、大都市に魅力があるように見えるということ自体は、これはもう一定程度しょうがないことなのかなと思うんですよね。若い人たちにとってはもう輝いて見えちゃうってことはしょうがないっていうところもあるのかなと思いますんで、それはそれで受け入れつつ、しかし、本当に鳥取でなきゃできないことっていうのは何なのかなってことを考えると、やはり、私は人との関わりの体験が豊かに持てるっていうことなのかなと思います。企業経営の方とかも多くお感じのことだと思いますけれども、やはり、コミュニティーが小さいっていうことを通じて、人と深く関わって、自分の存在の社会的意味ということを知りやすい、わかりやすいっていうところがあると思うんですよね。そういう人との関わりの機会っていうのを、要するに知るだけではなくて、関わりの機会によって、社会の、何らかの課題が小さくても解決していくっていうような体験っていうのを、学校教育の中で少しずつ作っていくとかっていうことも、とても大事なことになるんじゃないかなということを今改めてお話をお聞きしながら思った次第です。

・それから、もう1つ、今、改めて皆さんの話をお聞きして思うのは、やはり物差しを多くしなきゃいけないってことは、もう10年以上言われてることかと思います。いわゆる評価だけではなくて、人間の価値を評価する、素晴らしさを評価する物差しっていうのはたくさん持っていなきゃいけないっていうことをですね、改めて皆さんのお話をお聞きしながら、感じた次第です。その中で、高校をこれからどういうふうにその多様なものに変えていくかっていうことは、県教委にとって重要な課題ですし、それから、そういうことでも関係しますけれども、人間というのが、そういう学力的な情報処理するっていう側面だけではなくて、感性的な存在であるってことですよね。人間は心を持っていて、心によっていろんなことを感じていくんだっていう、感性的な存在であるということ。県立美術館ができたりだとか、朝に美術鑑賞したりするみたいなことも最近、少しずつ流れになってきてるかなと思いますけれども、改めてその数字ということももちろん大事なんだけれども、人間の感性というものをしっかりと育て、そして、人との関わりもしっかり作っていくっていうことを、学校教育の発達段階に応じて、しっかり提供していくっていうことが重要なことになるかなというふうなことを感じた次第です。

（中西部長）

・それでは足羽教育長よろしくお願いします。

（足羽教育長）

・各委員の皆様方から貴重なご意見をいただきました。本当にありがとうございました。

・主なもの、すべてにはお答えがなかなかできる時間がありませんが、英語教育について、小中の連携の大切さ、これはもうまさしくその通りでございます。英語のプランも小中高プランを策定しておりますが、やはり小校区内での連携というのをより深めるように、私も各市町の教育長や首長さんにお願いをしているところであり、ここの繋ぎっていうのはやはり英語嫌いを作らない1つポイントになるのかなと思います。そして、この英語教育の改善、中学校教員の向上というのは、やはりこの授業改善を図る上ではもう欠かせない部分であろうと思いますので、中学校の教員の方にも、どんどん

その検定の受講等も含めて働きかけをして参ります。ＩＢＡの活用、どんどん今後その分析ももとに活用して参ります。それからＡＬＴの活用も、この夏も 1 day イングリッシュというイベントを実施して、ＡＬＴ、ネイティブスピーカーと交流するような機会を持ちました。今後も継続して参りたいと思います。

・宿題やテストのこと、改善の余地はないか、いただきました。e ラーニング教材を各市町の学校で使っております。それぞれの学力に応じた力に応じた学びができるような仕組み、「すらら」といったような教材もございます。このあたりがうまくその辺りに組み込んでいけないかということを考えたいと思います。

・インクルーシブ教育、これは国の方でも今動いておりますが、共生社会の実現と同時に、個別最適化、これをいかに図っていくかということでモデル事業もスタートしているところでございます。本県も、そうした視点で今検討を進めているところでございますので、本当の意味で必要なインクルーシブ教育の推進を考えて参ります。

・子どもたちの意識等はどうかということがありました。資料の 27 ページ、毎年行いますこの学力調査の中に、子どもたちの自分の良いところがあるかとか、或いは地域の活動に参加してるかとか、夢目標はといったようなことを毎年確認しております。大切な子どもたちの意識がどうか、これに基づいた施策でなければいけない。この辺りを再度確認しながら進めて参ります。

・そして、情報が保護者に届いてないんじゃないか、この部活動のことも含め、各段階に応じてやっぱり発信の工夫というのをもっと我々も工夫すべきだなというふうに反省を持っております。ＣＳ、コミュニティスクールもほぼ全校に入っております。そんなあたりからの発信というのも 1 つ手かなと思っていましたので、必要な情報が必要な方に届く。このあたり不登校のこともありましたが、ポータルサイトも作っていくようにしておりますのでまた、その辺りも含めて情報をお届けしたいと思います。

・子どもたちの可能性を引き出すことのお話もございました。これは不登校対策で倉吉西中学校が、一人一人の子どもたちの状況を全職員が共有するというふうな、好事例も出ているところでございます。そのことが、子どもたちにとって認められている、見てもらっている、考えていただいてる、そんな自己効力感にも繋がってるという例がございました。先生方の、そうした共有を図ること、そして多くの目で見ることによって、その先生方の迷い、これも解消にも繋がるんじゃないかなというふうに思ったところでございます。

・いただいた貴重なご意見すべてにお答えすることがなかなか難しいんですが、本当に必要な情報が必要な方に届く、或いは子どもたちに届く。そういったことに、今後も注力、尽力をして、教育施策を進めて参りたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

（中西部長）

・いただきました質問、県外生をどのぐらい呼び込んでいくのかとか、県外生の多い鳥大や環境大では数値を取っておりますので、そういったことなど後で整理いたしまして、またお答えしたいと思います。それでは最後になりますが、平井知事ごあいさつをお願いいたします。

（平井知事）

・今日は本当にどうもありがとうございました。多岐にわたるご意見があり、この大綱で文章上ですね、もう少し加えた方がいいところ、若干あったかと思います。その辺また教育委員会の意見を聞い

て、多少細工もさせていただきたいと思います。

・今日いろんなご意見が出まして、結構根本論もありましたし、或いはいろいろと施策、具体的な議論もあったと思います。先ほどお話ありました、もう子どもがどうしようもなく減っていくという現実と向き合う中でですね、例えば高校をどうしていくのかなどは、特色ある高校づくりとあわせて、おそらく新年度の大きなテーマになるんではないかと思います。その辺はこれから詰めていくという段階だと思うんですけども。非常に世間の関心も高い分野でありまして、しっかりと出口に行き着くように、そうした議論もこれから十分やっていかなきゃいけないのかなというようなお話もあったかと思います。大綱の中にそうした、今後の見直しを含めた議論の重要性ということも、やはり盛り込んでいくテーマかなというふうにも思いました。

・また今日、例えば具体的なところでは、英語教育のお話について、指標なんかも、CELT-S（セルト-エス）ですか、そういう指導上の指標もあるんじゃないかとか、或いはＩＢＡテストっていう手法もあるんじゃないかとか、いろいろと私もちょっと門外漢でよくわからないとこありますけども、ぜひ教育委員会でもまた議論させていただきまして、やはり一つのテクノロジーといいますか、ツールとしてですね、そういうものをしっかりと活用していけるようなことって大事かもしれません。何が適切なのか、またいろいろと議論をしていければなと思います。

・また、幼保小の連携とか、小中の連携のお話もありました。いろいろ課題を抱える子どもたちも、大切な情報というものも引き継いでいく必要がありますが、本県で、そうした連携を１つ軸にしてやっていこうと言う方向性も出しておりまして、今日のようなお話もしっかりとこれからの運用上ですね、大切にしていく必要があるのかなと思います。

・また、不登校の問題、これもフリースクールなどいろんなものがありますよっていう情報、今まで教育委員会の中の話だとどうしても学校中心でありますけども、学校以外のそうした情報なども含めて、やはり悩んでおられる保護者や家庭、子どもに向き合っていく、そんな工夫も必要なのかなというふうにも思いました。

・また、宿題だとかテストっていうものがやっぱり子どもたちにとって非常に重要ですし、その成長させる意味でも、促進剤としてプロモーションになるというふうに思います。こういうものを上手に活用するっていうのはやっぱり学校教育のもう１つの側面として、授業と、それ以外のテストや宿題というところ。これも、そういうご提案もありましたけれども、ＰＤＣＡサイクルを回すかのような、或いは自分で計画して学習目標を達成していく、そういうことの指導もまた１つ大切なのかもしれません。まだ十分本県もできてないところもあるのかなと思って伺っておりました。

・そういう形でですね、今日の議論というものも、教育委員の皆さんとも協議をさせていただきながら、これからの教育システム改革に入れていければというふうに考えております。「風やみぬつぼみもつ梅もたぬ梅」と、久保田万太郎さんが詠んでおられますけども、やはり子どもたち、木々の花開く成長もそうだと思いますが、それぞれのリズムがあるんだろうと思います。ドロシー・ロー・ノルトも言っていましたが、「子どもは、その子の歩幅で学ぶ」ということも、まさに至言だろうというふうに思います。ですからそうしたいろんな子どもたちと向き合いながら、我々としてはその伸びる環境をどういうふうに提供していくかっていうことなのかなと今日のお話も伺いながら痛感をさせていただきました。大変活発なご議論いただいたわけでありまして、新しいメンバーで、またこれから今の議論を深めていければと思います。本日は本当にありがとうございました。

（中西部長）

・以上をもちまして、令和５年度第２回鳥取県総合教育会議を終了いたします。